執筆者紹介（論文掲載順）

論文

①橘　信雄　真言宗豊山派総合研究院宗学研究所主任研究員
②南　昌宏　高野山大学教授
③土居　夏樹　高野山大学准教授
④西　弥生　種智院大学人文学部仏教学科講師
⑤新井　弘賢　真言宗豊山派総合研究院事相研究所研究員・大正大学綜合仏教研究所研究員
①北村　太道　種智院大学名誉教授
②桜井　宗信　東北大学大学院文学研究科教授
③種村　隆元　大正大学仏教学部准教授
④仇　云波　種智院大学客員准教授
⑤星野　壮（壮英）　大正大学文学部専任講師・真言宗豊山派総合研究院現代教化研究所研究員
⑥徳重　弘志　高野山大学密教文化研究所専任研究員
⑦松本　恒爾　智山伝法院嘱託研究員

書評

徳重　弘志　前掲
加藤　精純　大正大学仏教学部専任講師

日本密教学会役員名簿（学会配列は五十音順）

理事長　榊　義孝

高野山同学会

（〒六四八―〇二八〇　和歌山県伊都郡高野町高野山三八五　高野山大学内　電話〇七三六―五六―二九二一）

常任理事　乾　龍仁　理事　佐藤　隆彦
理事　添田　隆昭　監事　奥山　直司

種智院大学密教学会

（〒六一二―八一五六　京都府京都市伏見区向島西定請七〇　種智院大学内　電話〇七五―六〇四―五六〇〇）

常任理事　北尾　隆心　理事　松本　峰哲
理事　仲田　順和　監事　スダンシャキャ

智山勧学会

（〒一〇五―〇〇〇二　東京都港区愛宕一―三―八　真福寺中　真言宗智山派宗務出張所内　電話〇三―三四三一―一〇八一）

常任理事　元山　公寿　理事　種村　隆元
理事　芙蓉　良英　監事　佐々木大樹

豊山学会

（〒一七〇―八四七〇　東京都豊島区西巣鴨三―二〇―一　大正大学豊山研究室内　電話〇三―三九一八―七三一一）

常任理事　野口　圭也　理事　堀内　規之
理事　星野　英紀　監事　大塚　伸夫

事務局

事務局長　佐々木大樹　事務局員　別所　弘淳

平成31年3月20日　印刷
平成31年3月30日　発行

密教学研究　第51号

編集兼発行者　榊　義孝
印刷者　株式会社三陽社
発行所　日本密教学会事務局
東京都豊島区西巣鴨3―20―1
大正大学　真言学智山研究室内
電話　03(3918)7311(代)

（製作＝青史出版）

	「称名寺本b」	「宗順本」	「文明四年版」	当該博士記載箇所
No.77 〔胎蔵界〕「勧請」「三」（k—554）	三	三	三	「三」（k—554）
No.78 〔胎蔵界〕「五誓願」「誓」（k—659）	誓	誓	誓	「誓」（k—659）
No.79 〔胎蔵界〕「五誓願」「得」（k—662）	得	得	得	「得」（k—662）
No.80 〔胎蔵界〕「五誓願」「大」（k—663）	大	大	大	「大」（k—663）
No.81 〔胎蔵界〕「五誓願」「菩」（k—664）	菩	菩	菩	「菩」（k—664）
No.82 〔胎蔵界〕「礼仏」「敷」（k—796）	敷	敷	敷	「敷」（k—796）「k」（k—821）
No.83 〔胎蔵界〕「礼仏」「殊」（k—822）	殊	殊	殊	「殊」（k—822）
No.84 〔胎蔵界〕「礼仏」「弥」（k—836）	弥	弥	弥	「弥」（k—836）
No.85 〔胎蔵界〕「礼仏」「切」（k—894）	切	切	切	「切」（k—894）

書　評

北村太道・タントラ仏教研究会訳『全訳　降三世大儀軌王／同ムディタコーシャ註釈』（『金剛頂経』系密教　原典研究叢刊三）

二〇一四年三月　起心書房

徳重　弘志

一

本書は、起心書房から刊行されている『金剛頂経』系密教　原典研究叢刊の一冊である。二〇一八年十一月現在で、同シリーズには、次の四冊が含まれている。

一、　北村太道・タントラ仏教研究会訳『全訳　金剛頂大秘密瑜伽タントラ』

二、　中島小乃美『『一切悪趣清浄儀軌』の研究』

三、　北村太道・タントラ仏教研究会訳『全訳　降三世大儀軌王／同ムディタコーシャ註釈』

四、　北村太道『初会金剛頂経概論『タントラ義入』の研究――ブッダグヒヤ本論・パドマヴァジュラ註釈の全訳と解説――』

このように、同シリーズが扱っている文献には、真言宗で重視される『初会金剛頂経』と密接な関係性を有するとともに、チベット語訳のみが現存する経典・注釈書であるという特徴が存在する。

本書の最大の特色は、不空訳の『金剛頂瑜伽十八会指帰』における第四会に相当する経典を、その注釈書とともに、世界ではじめて全訳したという点である。

本書の執筆者は、種智院大学名誉教授である北村太道先生と、タントラ仏教研究会に所属する諸先生である。なお、本書の奥書によれば、同書の和訳に関わったタントラ仏教研究会のメンバーは、池谷雅典、鴨下直弘、スダン・シャキャ、高橋成明、高橋翠、中島小乃美、中塚浩子、松尾佳美、山田哲也の各氏である。

本書の目次に従えば、同書の内容は、「はしがき」、「降三世大儀軌王」、「Muditakoṣa 著　聖降三世と名づくる註釈」、「あとがき」、「表　諸天と灌頂名」、「索引」、といった項目で構成されている。このうちの「降三世大儀軌王」と「Muditakoṣa 著　聖降三世と名づくる註釈」とが、チベット語訳からの和訳である。

書評に際して、本書は経典および注釈書の和訳を主目的としたものであるが、その翻訳の是非を評することは、浅学の評者がなし得るところではない。他方、本書の「はしがき」には、筆者の『降三世大儀軌王』に対する優れた見識がふんだんに盛り込まれている。

そこで、本書の「はしがき」に沿って、筆者の見識を紹介するとともに、本書の影響に関する評者の管見を少しだけ述べさせて頂き、その責を果たしたい。

二

まず、本書の「はしがき」の小見出しは、次の通りである。

一、　*TLV* に関する先行研究
二、　*TLV* の構造
三、　Mūla タントラ各章の特色及び主な内容
　①　金剛叶迦羅儀軌
　②　如来儀軌
　③　金剛手儀軌
　④　観自在儀軌
　⑤　虚空蔵儀軌
　⑥　金剛拳儀軌
　⑦　文殊師利童子儀軌
　⑧　金剛輪儀軌
　⑨　虚空庫儀軌
　⑩　弥勒儀軌
四、　Uttara タントラの特色及び内容
五、　流通分
結び

三

それでは、「はしがき」の内容に沿って、本書における筆者の見識を紹介していきたい。

【*TLV* に関する先行研究】においては、『降三世大儀軌王』(*TLV*) に関する研究史が整理されている。

まず、酒井真典先生の研究を、「わが国における *TLV* の研究の先駆となった」と評価している。その上で、同研究による判明事項として、①『降三世大儀軌王』が『金剛頂経』の第四会に相当する点、②同経典に愛染明王の祖形が登場する点、③同経典に春・夏・秋・冬の四金剛女が登場する点、を挙げている。

次に、川嶋健先生の研究について言及し、その成果として、①『降三世大儀軌王』と『理趣経』との関係性を指摘した点、②同経典の成立年代を「不空の時代までには現形が成立していた」と指摘した点、を挙げている。なお、当該箇所では、「川嶋」ではなく「川島」と表記されているが、単純な誤記であろう。

最後に、筆者である北村太道先生ご自身による『降三世大儀軌王』の「秘密成就法」に関する研究に触れている。

その上で、『降三世大儀軌王』を研究する次世代の研究者に向けた「少なくとも MK の註釈を通して綿密に読むことから始めて、『初会金剛頂経』、特に第二章の「降三世品」との関わり、さらには『理趣広経』との関わりを問題にしながら、その理解に努める以外に方法は無いと考える。」という、同経典の全体像を知るための助言が記されている。

また、この助言では、Muditakoṣa による『降三世大儀軌王』に対する注釈書(MK) の重要性に触れられているが、本書にはその全訳も含まれているため、研究を行う上で非常に有益である。

【*TLV* の構造】においては、『降三世大儀軌王』が mūla(根本)と uttara(後)の二つのタントラで構成されていることに言及している。

その上で、前者に関しては、全二十章から成り立つことや、それらの章の順序や内容が『理趣広経』の章構成と近似することについて指摘している。

後者に関しては、「印や金剛薩埵などの定義づけをするなど、瑜伽タントラにおいて重要な位置を占めている。」と述べている。

【Mūla タントラ各章の特色及び主な内容】においては、経典全体の特色に関して、「*TLV* は、金剛薩埵が毘盧遮那如来に代わって法を説く所と、またその金剛薩埵性を獲得することを説く所に、大きな特徴が有ると言えるのである。」と指摘した上で、各々の章における特色および内容を概説している。

【Uttara タントラの特色及び内容】においては、当該箇所は、金剛手の十七の請問と、それに対する世尊の回答とで構成されていると述べている。

その上で、その問答の内容について、「これらの内実のほとんどは『初会金剛頂経』と『理趣広経』の教理によって充当されており、本儀軌が釈タントラと見做される所以がそこにあると言える。」と指摘している。

【流通分】においては、『降三世大儀軌王』の末部には、金剛手による世尊への礼拝や、世尊と一切如来による金剛手への讃嘆について記されていることや、最後尾には「奥書き」、「縁起法頌」、「吉祥句」が存在することに言及している。

【結び】においては、『降三世大儀軌王』を、「『初会金剛頂経』の第二章「降三世品」を中心に、初会全体、つまり第三章「遍調伏品」の蓮華及び敬愛の説なども踏まえ、さらには『理趣広経』の構想とも関連する内容を持つ、特異な瑜伽儀軌」と定義している。

その上で、筆者が「はしがき」全体で披瀝した内容を、十二項目に要約して提示している。

以上が、「はしがき」で提示された筆者の見識である。筆者が指摘しているように、『降三世大儀軌王』を深く理解するためには、同経典に対する注釈書のみならず、関連する諸経典に通暁する必要性がある。

その点において、本書の筆者である北村先生や、タントラ仏教研究会に所属する諸先生は、『金剛頂大秘密瑜伽タントラ』、『一切悪趣清浄儀軌』、『タントラ義入』と

いった関連文献を翻訳・研究し、同シリーズとして刊行されていることからも、その高い見識を窺い知ることができる。

そのため、本書に記された『降三世大儀軌王』に関する情報は、現時点における最先端の知識であり、密教経典を専門的に扱う研究者のみならず、関連領域の研究者にとっても、非常に有益である。

四

『降三世大儀軌王』に関しては、その重要性に反して、あまり研究が進められてはいない。しかし、近年では、本書の影響によって、同経典を用いた研究の数が増加している。

試みに、『降三世大儀軌王』およびその注釈書を中心とした研究を調査したところ、二〇一八年十一月現在で、十二件の論文が存在した。それらの論文を、時系列で並べると、次のようになる。なお、論文名については、煩雑になることを避けるため割愛した。

- 一九五〇年：酒井真典（『密教文化』一二）
- 一九五二年：酒井真典（『密教文化』二七）
- 一九八七年：川嶋健（『論集』一四）
- 一九八九年：川嶋健（『印度学仏教学研究』三七（二））
- 一九九四年：北村太道（『密教学研究』二六）
- 二〇〇八年：中塚浩子（『印度学仏教学研究』五六（二））
- 二〇〇九年：中塚浩子（『印度学仏教学研究』五八（一））
- 二〇一二年：北村太道（『平安仏教学会年報』七）
- 二〇一四年：中島小乃美（『密教学研究』四六）
- 二〇一五年：安元剛（『密教学』五一）
- 二〇一五年：木村美保（『豊山教学大会紀要』四三）
- 二〇一六年：木村美保（『豊山教学大会紀要』四四）

さて、本書の「あとがき」には、「北村太道先生主宰のタントラ仏教研究会において、２００８年春に始められた当軌の註釈『聖降三世と名づくる註釈』の勉強会から5年を経て、北村先生の指導と後続の研究者達をも視

野に入れた瑜伽タントラ研究への情熱に引っ張られ、また密教学の興味の尽きない深さと豊かさに背を押され、本書が完成しました。」と述べられている。

そのため、本書が刊行されたのは二〇一四年であるが、実質的に影響を及ぼし始めたのは、二〇〇八年からと考えられる。前掲したように、二〇〇八年には中塚氏による論文が公表されているが、同氏はタントラ仏教研究会のメンバーである。

このように考えると、『降三世大儀軌王』の研究史は、本書の刊行前（一九五〇～二〇〇七）［論文数：五件］、刊行準備期間（二〇〇八～二〇一四）［論文数：四件］、刊行後（二〇一五～現在）［論文数：三件］、という三期に分けることができる。つまり、同経典に関する研究の半数以上が、本書の影響を受けているのである。

本書は、『降三世大儀軌王』に関する今後の研究にも影響を及ぼし続けていくと考えられるため、同分野における金字塔と言えよう。

今後の研究者は、『降三世大儀軌王』を研究する際、本書を座右の書とした上で、その内容を乗り越えていく必要性がある。

本書は、経典全体の和訳という性質上、チベット語訳のテクストとしては、デルゲ版と北京版のみが用いられている。そのため、今後の研究者には、複数の版本・写本を用いたテクスト校訂を行い、本書の細部を修正するという作業が求められるであろう。

正木　晃著
『現代日本語訳　空海の秘蔵宝鑰』
二〇一七年十二月　春秋社

加藤　精純

日本において、空海という名前を生まれてから一度も聞いたことがないという人はまず少ないと言ってよいかもしれない。真言宗の宗祖であることまでは知らなくとも、僧侶であることくらいは誰もがわかっている。海外においても、ひょっとすると、Kukaiという名を見聞きし、日本の僧侶であることを認識している人はいるかもしれない。空海は有名人である。

しかしながら、空海が生涯を通して何を悩み、何を考え続けてきたのかと問われれば、こうした問いに、正確に答えることができる人はまず稀であろう。それは、平安初期という時代に、空海が悩み、考え続けてきたことを空海自らが書き記した著作を読んだことのある人が少ないという極めて単純な理由に起因する。それはなぜかと言えば、空海の文章はとてつもなく難解であるからだ。また、専門的な用語が頻繁に使用され、幾多の他文献から難しい文章が大量に引用され、仏教の中でも、特に、解釈が困難な秘密の仏教、すなわち、密教について空海が説いているからだとも言える。空海の著作を読んだことのある人は少ないと言ったが、実は、密教そのものが難解すぎて読みたくても読めないというのが適切な言い方であろう。そもそも仏教用語が何を意味するか不明であることが多いにも関わらず、真言密教を体得した空海の文章には当然のことながら密教用語が頻繁に出現し、かつ、空海の書く文章自体も難解であるため、結局、密教とは何かを知りたくとも、在家者、いや、正直に言えば在家者・出家者双方ともに読むことすらできないという現実が横たわっているのである。

こうした折に、期せずして、正木晃著『現代日本語訳空海の秘蔵宝鑰』が上梓された。驚くことに、著者である正木晃先生は真言宗の僧侶でもなく、真言宗学の学者でもない。正木先生の専門は宗教学である。特に、修行